男の敵、女の天敵

裸エプロン先輩（笑）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男の敵、女の天敵

【Ｎコード】

Ｎ４６７５Ｕ

【作者名】

裸エプロン先輩（笑）

【あらすじ】

主人公の能力の都合上、原作キャラの劣化が著しい、そんなめだかボックスの二次創作。ハーレムもの。ＴＳ有り。

見切り発車

金城勇魚（きんじょういさな）には、たった一つだけ自慢があった。勉強ができるわけでもない。運動ができるわけでもない。容姿なんていいとこ二枚目半だし、友達なんて一人もいない。そんな彼ができる、たった一つの自慢話。

未だ幼い勇魚は無邪気に言った。

「これは自慢なんだけど、僕って物凄く女の子にモテルんだ」

直後、筋骨隆々の体育教師の巌の如き拳が、和かに笑う勇魚の頬へと突き刺さり。彼は錐揉み回転しながら、数メートルもの距離を吹っ飛んだ。

勇魚は昔から、異性とてつもなくモテた。生まれた瞬間には助産婦を魅了し、次の瞬間には母親を篭絡した。母が退院する頃には患者看護師関係なく、その全てを惚れさせていたし、家に帰れば実姉すらをも容易く落とした。

それは異常な光景だった。何せ、生後間もない赤ん坊に、誰も彼もが恋する乙女の如き態度で接するのだ。傍から見れば不気味なことこの上なく、それ故その光景は異常としか表現できなかった。

しかし明らか異常があろうと、それは直接害を及ぼすものではな

い。当初は不信感を覚えていた勇魚の父も、日々を過ごす内に違和感を感じなくなっていった。良い父親であった彼が息子を可愛く思わない筈がなく、だからこそ妻や娘が親馬鹿だったりブラコンだったりしても、あまり強く言えなかったのである。

そうして仲睦まじくもどこか歪な家族の下で、勇魚は何事も無くすくすくと成長していった。だがしかし、歪みは矯正された訳ではなく、それはただただ見てみぬ振りをされてきただけで。勇魚にとっては些細な……しかし他の者にとっては、些細というにはあまりにも……あまりにも大きすぎる事件を切欠に、それは表面へと現れていくこととなる。

それは突然の出来事だった。ある日勇魚の父が帰宅すると、家中がまるで嵐でも通り過ぎたかのようにぐちゃぐちゃで。しばし呆然とする彼だったが、すぐに我に返ると愛してやまない家族を探し始めた。しかし、探せども探せども見つからず。やがて町中を駆け回り、夜が明けた頃になって漸く彼は警察に連絡することを思いついた。

幸いなことに、勇魚はすぐに見つかった。近所の家の女の子に誘われ、彼女の家に遊びに行っていたらしい。そしてそのまま遊び疲れて眠ってしまい、気が付けば一拍していたとのこと。勇魚の父は、愛しの息子が何事もなかったことを、心の底から喜んだ。

後日。勇魚の母と姉が発見された。ただし、二人は物言わぬ屍の化していたが。死体はもう、目を覆わんばかりにひどい有様だった。どれだけの憎しみが込められていたのか、体中はくまなく刃物でズタズタにされ、更には火まで放たれていたのだ。歯型からどうにか身元は特定出来たものの、全身の皮膚はドロドロに溶けていて……身元確認という望まぬ再開を果たした勇魚の父は、静かに涙を流し

た。

愛しい妻と、可愛い娘の死。そして、唯一生き残った勇魚。この世にたったひとりだけの家族。死んだ二人の分まで、しっかりコイツを育て上げよう。勇魚の父はそう決意し……しかし、勇魚の一言でそんな思いは砕け散った。

「え？　おかーさんとおねーちゃん、死んじゃったの？　ふぅ～ん……。じゃあ、あたらしいのちょうだい」

このとき彼は理解した。自分にとっては唯一無二の、愛してやまない妻と娘。しかしそれも、息子にとっては換えの利く使用人程度の価値しかなかったのだと。なぜ？　どうして？　あの天使のように可愛かった息子は、こうも歪んでしまったのだ？　息子の異常性から目を逸らし、妻達に教育を任せきりだった自分が悪いのか？　だとしたらこれは、正に自業自得。しかし、だからといって納得出来るハズもない。こうして、彼は初めて愛しいハズの息子に、激しい殺意を抱いたのだった。

箱庭総合病院。そこでは『異常』な子供を診察して貰えるらしい。そんなことを聞きつけた勇魚の父は、今更ではあるが息子を診てもらうことにした。もし息子の異常性を矯正できるのなら、私は再び息子を愛せるのではないか？　その、あまりにも儚い希望に縋って。しかし……。

「……どうでしょうか？　息子の勇魚は……」

「ええ、とても可愛らしいお子さんですね！　あの、お義父さんとお呼びしても？　今すぐ夫とは別れてきますので！」

幼児体型の女医は、全く役に立たなかった。それどころか、専門家すら容易く篭絡する息子の異常性を再認識させる結果となった。

もともとさして期待はしていなかったが、これはひどい……。医者の立場でありながら、あの子の異常性に毒されるなど……。

「……お断りします。そんなことより息子の診断結果をお聞きしたい」

「……そうですか。とっても残念です……。えっと、勇魚君の異常性は『魅了』ですね。どうやら女性を問答無用で惚れさせる能力があるみたいです。私もご覧の有様ですし、さっきなんて気難しそうな子に『私はおまえに尽くすために生まれてきた！！』とか言われてましたし」

「……どうにかなりませんか？」

「そうですね……。まず、私と彼が愛し合うことで……」

「わかりましたもういいです」

勇魚の父の頭に、病院は頼りにならないと刻み込まれた。

こうして問題は解決されることもなく、淡々と日々は過ぎていく。時を経るに連れていつしか勇魚の父は、徐々にではあるが息子を憎悪するようになっていた。警察が捕まえた犯人が、勇魚が好きなあまり犯行に及んだという自白も彼の憎しみを加速させた。勇魚が生まれたから、妻と娘は殺された。勇魚が生まれたから、私は今こんなにも不幸だ。だから、勇魚も不幸に成らなければならない。彼の思考は次第に染まっていった。

いつしか勇魚は父に暴力を振るわれるようになった。私を見る目が気に入らない。甲高い声が不快。いつも女を侍らせていてムカつく。そんな理由で勇魚はことあるごとに殴られた。それだけであれば、勇魚に好意的な女性の手によって、すぐに彼は救出されたことだろう。しかし、そうはならなかった。

勇魚は女性にとてつもなくモテる。その反面、男性には徹底的に嫌われる。それも『異常』の一部なのか、それとも単純に男が嫉妬に狂っているだけなのか。とにかく勇魚は、女にモテるほどに男を敵に回した。

初めは男子生徒に散発的に殴られたり、蹴られたりする程度だった。しかし、それを見咎めた女子生徒、そして女教師は、徹底的に殴った生徒を詰った。詰って詰って罵って、ついにはその子供が不登校になってようやく落ち着いた彼女らは、やり遂げた顔で誇らしげにこう言ったという。

「やっといなくなったね、あの害虫。自殺しなかったのは残念だけど……。まぁ、いっか。消えてくれたし」

それからだ。勇魚を憎む男たちが結託し、組織的に勇魚を追い込

みにいったのは。結果として勇魚へのイジメは陰湿さを増し、教師は勿論、教育委員会すら味方に付けたその組織力は、事態を発覚させることもなく。彼らは少しでも勇魚を傷つけようと、貶めようと、できることはなんでもやった。その一つが、勇魚が虐待を受けている事実の隠蔽である。

組織的な勇魚イジメは数年間に渡って続けられた。実行犯は人吉善吉という少年を中心としたグループだ。彼は母親を寝取られたとのことで、勇魚を見る視線には常に濃厚な殺意が込められていた。そのやさぐれた雰囲気は、とても小学生とは思えないほどだ。

善吉は非常によくやってくれた。どうやら友達にとんだ人でなしがいるらしく、彼のやることは勇魚を徹底的に追い詰めていった。給食に虫を入れる？　トイレに行かせず教室で漏らさせる？　そんなものは序の口だった。

救いの手は隠蔽、賄賂、権力でもって完璧に取り除かれ、更には日々エスカレートを続けるイジメ。やがて勇魚の顔からは笑顔がなくなり、口数も極端に減っていって。そしてついには、どんなことにも嫌悪感すら感じなくなり始めた頃のこと。善吉は仕上げとして、彼にこう囁いた。

「おまえさぁ、生きてる意味あんの？　……死んだ方がいいんじゃね？」

それを聞いた勇魚は、無表情で善吉を見返した。ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべる善吉と、その取り巻きたち。今までに刻み込まれた条件反射で、勇魚の意思に関係なく彼の体はその命令を実行する。勇魚はのろのろと窓へと歩み寄ると、そこから無造作に乗り出して……。

落下の浮遊感に背筋を凍らせつつ、勇魚は思った。死にたくない、と。しかし状況は絶望的。女の子は皆が僕の味方。でも、男は皆が僕の敵。なら、この世に男なんて必要ない。女だけがいればいい。しかし、周りを囲むのは男ばかり。僕が生きるにはどうすればいい？

ああ、簡単じゃないか。敵（おとこ）を味方（おんな）にすればいい。

その日、世界から勇魚の敵は消え去った。

金城勇魚。異常（アブノーマル）は『魅了（チャーム）』。そして、新たに目覚めた過負荷（マイナス）は『性別反転（トランスセクシャル）』。ある意味、世界はこの日から緩やかに滅びへと向かっていったのではないだろうか？　なぜなら勇魚という存在がいる限り、人類は彼以外を愛する術を奪われたも同然なのだから。

黒神めだかの場合

金城勇魚にとって幸運だったのは、かなり早い段階で黒神めだかというバケモノと出会えたことだろう。男という男をデフォルトで敵に回す勇魚には、彼女の庇護は必要不可欠であったのだから。

それは彼が父親に連れられ、箱庭総合病院へと赴いたときのことだった。やけに体中をべたべたと触ってくる、大人には到底見えない女医から必死になって逃げ出した勇魚。彼が父のもとへと逃げ込もうと、他人の迷惑顧みずに病院内を駆けていると、不意にこんな声が聞こえてきた。

「きっと君は、皆を幸せにするために生まれてきたんだよ！」

ピタリ。勇魚の足が止まる。皆を幸せにするために生まれてきた？　もし本当なら、是非とも会ってみたい。何しろ“皆を幸せにするために生まれてきた人間”だ。きっと、会うだけでも幸せになれるに違いない。

そんな思いから、勇魚は声のした扉を開けた。それが一人の男の人生を狂わせることになるなどと、夢にも思うことなく。……最も。もしそのことを知っていたとしても、彼ならこう言って扉を開け放ったのだろうが。

曰く、「男なんてどうなろうと知ったことじゃない」と。

扉の先は所謂託児室のような部屋らしく、そこら中に玩具類が散乱していた。ただ異常なことに、何故かパズル系の玩具はその全てが完成していたが。中には子供が二人。勇魚と同い年くらいの奇抜な髪色の少年が一人と、勇魚より少し年上に見える妙に大人びた雰囲気の少女が一人。状況から察した勇魚は、どうやら少女がパズルを解いて少年に自慢していたらしい、と理解した。理解して、フッ……と鼻で笑った。かつて姉が言っていたことを思い出したからだ。

「パズルなんてできても、生きていく上ではなんの役にもたたないって！！」

それはただ、パズルが解けなくてぐずっている勇魚を慰めるためだけに言われたことで。勇魚本人も、薄々と感ずいていた。……要するに、彼が浮かべたのは自嘲の笑みだったのだ。

しかしどうやら、相手はそうは思わなかったようで。

「むっ……。なんだよ、きみ」

少年がそう声を掛けてくる。同時、こちらに背を向けていた少女が振り向いた。振り向いて……そして、勇魚を見て見事に固まった。それはもう、まるで彫像の如き固まり具合だった。しかし、勇魚はそんな少女には目もくれない。こんなことは、彼にとっては日常茶飯事なのだから。

「こんにちは。ぼくはきんじょぶっ……」

固まる少女を視界からごく自然に外した勇魚は、和かに笑いながら少年へ名乗ろうとした。しかしそこで、漸く解凍を果たした少女

が猛烈に勇魚へと突進。押し倒す。そして気が付けば、何故か少女の唇と自らの唇が重なっていて……そのことに、勇魚はひどく混乱した。

「むぅ……？　ん、んん！？　むぐぅ……！！」

勇魚は暴れた。それはもう盛大に暴れた。手足をバタバタと振り回し、少女を思いっきり叩いた。だが、いくら叩こうが少女は一向に応えた様子もなく、それどころか彼女は徐々に頬を紅潮させ、瞳を潤ませていった。

勇魚は男としての本能で悟った。これはマズイ！！　と。実を言うと、彼には前にも似たような、身の危険を嫌でも悟らされるような表情を見たことがあった。……母と姉である。しかしそんなときは、正気な方がもう一方に強烈なボディブローをぶち込んでいたため、すぐに正気に返っていた。

しかし今はどうだ？　自分は無力、手も足も出ない。なら、周囲に助けを求める？　これも無理だ。少年は訳も分からずポカンとしている。勇魚は半ば混乱した思考で必死に抜け道を探すも、どうやら時間を掛けすぎたらしい。口の中へとねじ込まれ、うねうね蠢く少女の舌。勇魚はそれに快感を伴う気持ちよさと、同時に吐き気を催す気持ち悪さを感じた。

ここで不意に勇魚の脳に名案が閃く。……このまま吐いちゃえば、流石に離してくれるのでは？　それは悪魔の誘惑だった。そんなことをすれば、自分も彼女もゲロまみれは確実。もうこの病院には、恥ずかしくて来られない。かといってこのまま放置もマズイ。理由は解らないが、何か致命的な気配がする。

勇魚は悩んだ。悩んで悩んで悩み抜いた。しかし、やがて少女が体をまさぐってきたところで決意した。吐く！　僕は吐くぞ！！　そう意気込んで、固く瞑っていた目を開く。至近距離にある少女の顔は、今や蕩けきっていて、卑猥ですらあった。そんな彼女の顔を見て、勇魚は作戦を取りやめた。飲まれる……！！　普通に考えて有り得ないが、何故か勇魚にはそうなると確信できた。

そうして勇魚が万策尽き果てたときだった。救いは意外なところからやってきた。

「ちょちょ、ちょっと！！　あんたたち何やってんの！？　まだ二歳でしょ！？」

声のする方に目線を向ける。するとそこには、ついさっきまで診察を受けていた、やけに馴れ馴れしい女医がいた。名前は人吉瞳。二度と関わらないようにしようと思っていた勇魚は、彼女の名をしっかりと記憶していた。

「二歳なのにディープキス……。おまけにその先に進もうとしてるっ！？　い、いけません！！　あなたたちには早すぎますっ！！　って、きゃーーー！？　……い、勇魚君！？」

瞳が力尽くで少女を引きはがしに掛かる。見た目は子供にした見えない彼女だが、流石に二歳児よりは力がある。大人しく引き剥がされる少女。その顔はどこか満足げで、それでいて何故か誇らしげだった。そして後には、微妙に恍惚とした表情でぐったりしている勇魚だけが、力なく横たわっていた。

「ちょっと君、めだかちゃん！？　一体どうしてこんなことを！！　あの子は私が狙ってたのよ！？　もう離婚調停まで漕ぎ着けたの

に！！」

大人げなく私情ダダ漏れで少女、めだかを責める瞳。しかしめだかは、そんな瞳を意に介すこともなく完全無視。彼女は一心に勇魚だけを見つめ、凛とした様でこう宣言した。

「たった今確信した……。私は！　おまえに尽くすため“だけ”に生まれてきたのだ！　皆を幸せにするためなどと、勘違いもいいところであった！！　他人の幸せなど、おまえを幸せにするための供物に過ぎんというのに！！」

勇魚はぐったりとしていて、まるで聞いちゃいなかったが。

ちなみに。めだかに自分の考えを全否定され、自分と同い年の子供に本気で惚れている母親をまざまざと見せつけられて。更にはこの後、父と母の修羅場に何度も巻き込まれた少年、人吉善吉。彼の気持ちは如何程のものだったのだろうか？　……推して知るべしである。

安心院なじみの場合（前書き）

タイトル詐欺と言えなくもない。

安心院なじみの場合

校舎から飛び降りることを強要された勇魚。しかし彼は奇跡的に無傷だった。校庭にいた男子生徒たちを一瞬でＴＳ。更に次の瞬間には、そいつらを惚れさせクッションとして利用する。過負荷（マイナス）に目覚めた勇魚は、そんなウルトラＣをやってのけたのだ。……やってのけたのだ！！

……代わりに下敷きとなった女生徒（元は男子生徒）は、悲惨を通り越してグロくなっていたが……きっと彼女らも本望であろう。大好きな勇魚を守れたのだから。

死の恐怖を体験した勇魚。彼は今更ながらに思った。護衛が、自分を守ってくれる頼もしい存在が欲しい。そんなときに思い浮かんだのが、かつてとある病院で知り合った少女、黒神めだかであった。当時はあまりの熱烈アプローチに、回復すると同時に全速力で逃げ出してしまった勇魚だったが、今はそのことを激しく後悔していた。よくよく考えれば、黒神家は世界経済を担う有名な大金持ちだ。もし彼女との繋がりが消えていなければ、きっとその膨大な財力と、そして圧倒的な権力で、自分のことを守ってくれたに違いないのに……。

しかし、今からでも遅くはない。幸いなことに、黒神家は有名だ。ネット検索で住所が解る程に。こうして勇魚は黒神邸へと向かうことにした。邪魔する者は須らくＴＳしてポして捨ててやる！　旅立

つ彼はそんな腐った気概に満ちていた。

まあ、そんな気概とは裏腹に、呆気なく勇魚は黒神家へと到着した訳だが。待機でもしていたのか、そこには当然のようにめだかがいて。感動の再開！　的な感じで熱烈に歓迎され、そのまま当たり前のように彼女と共に暮らすことになった。そこにはドラマも何もなく、言ってみればただの予定調和であった。

勇魚は知る由もないことだが、実はめだかは既に勇魚の情報は殆ど掴んでいた。ではなぜ彼女は、愛しい人が凄惨なイジメを受けていると知っていながら、それを見過ごしたのか？　答えは簡単だ。黒神真黒と黒神くじら。この二人の異常（アブノーマル）に、妨害されていたからに他ならない。

黒神真黒はただ単純に、妹二人の心を奪った男への嫉妬心から。

黒神くじらは、めだかが何処からか手に入れてきた勇魚の写真を見て一目惚れし、尚且つ「好きな人が不幸な目に遭ってる俺って、なんて不幸なんだ！」気分を味わいたいから。

そんな理由でもって二人の天才は結託し、天才すら上回るバケモノを、どうにかこうにか足止めしていたのだった。

他人の技能を向上させることに関しては、神がかり的に長けている真黒。人体改造に長けており、理科生物学の分野においてはめだかをも上回るくじら。この二人が協力して鍛え上げた、黒神家の精鋭の皆さんには、流石の黒神めだかといえど未だ小学校中学年、後塵を拝するしかなかった。……そう、勇魚が飛び降りを強要されるまでは。

勇魚の学校に仕込まれた、無数の隠しカメラ。くじらの手によって仕掛けられたそれに、恐怖で歪んだ顔で飛び降りる勇魚が映る。そんな決定的な場面を、めだかは偶然にも目撃してしまい……結果、キレた。

髪色を白へと染めためだか。彼女はとても小学生には思えないバケモノ具合で、並み居る強者を次々と蹂躙していった。そして、ついに一歩家の外へと踏み出たところで……タイミング良く勇魚と遭遇したのだった。

後日、勇魚が危険だからという理由で、姉であるくじらを放逐したためだか。そのとき彼女は知ることになる。彼女が見た映像は、くじらが研究用に録画しておいたものだったのだと。何故くじらは、タイミング良くその映像をめだかの目に止まるようにしたのか？……きっとツンデレに目覚めたのだろう。

真黒のＴＳなどをしつつ、勇魚の日々は淡々と過ぎていった。そして、やがて勇魚が中学へと進学したとき。彼は黒神めだかに勝るとも劣らない人外、安心院なじみと出逢った。

金城勇魚の異常性『魅了（チャーム）』。別名、存在ポ。この異常（アブノーマル）は、ただ単純に異性を惚れさせるもの……では、ない。大まかに言えばそれで合っているが、厳密に言えば少々違う。正確には、“全ての女は、問答無用で金城勇魚に惚れる”という絶対の法則を世界に刻み込むという、無駄に壮大な能力である。

要するに、何が言いたいというと。つまり、大嘘憑き（オールフィクション）で能力をなかったことにされようが、無効脛（ライフゼロ）でスキルを無効化されようが、世界に刻まれた法則まで消えるわけではないのだ。だから……。

「なるほど、だから僕はこんなにも君に惹かれているんだね」

例え相手が人外である安心院なじみであろうと、初見での回避はまず不可避であった。

安心院なじみ。別に運命的な出会いをしたわけでも、前世の因縁を感じるわけでもない。ただ通っている学校が同じで、たまたま廊下ですれ違っただけの存在。しかし勇魚の異常（アブノーマル）は、たったそれだけで人外すらをも虜にしてしまった。

「君、悪平等（ノットイコール）になってみないかい？」

彼女の第一声はそれだった。後に彼女に聞いたところ、悪平等（ノットイコール）とは『「自分以外は平等にカス」と思っており、幸せも不幸も全て平等に無価値だという論理観「悪平等（ノットイコール）」を標榜する』者のこと……らしい。……あまりにも下手な口説き文句である。それだけ彼女、安心院なじみは動揺していたのだろうが……。そんなこと、勇魚が知るはずも無く。彼は僅かに顔を顰めると、彼女を完全に無視。そのまま立ち去ろうとした。

しかし、そんなことで引き下がるなじみではなかった。流石は自分以外はカスと言ってはばからない女である。彼女は去りゆく勇魚を強引に振り向かせ、そのまま唇を重ねた。そして発動する口写し（リップサービス）。勇魚は何か大切なものを吸い取られているかのような、そんなおぞましい感覚に震えた。拒絶反応から、咄嗟に

思い切りなじみを押したくった勇魚。そんな抵抗も虚しく、彼女はびくともしなかった。十秒、二十秒。長い長いキスは続く。

どれほどの時が過ぎたのだろうか？　やがてなじみが勇魚を解放したときには、勇魚の中にあった大事な何か……『魅了（チャーム）』、そして『性別反転（トランスセクシャル）』。二つのスキルは彼女に奪われていたのだった。

「さて……。ああ、そんな絶望的な顔をしないでくれよ。僕はちょっと、君に話を聞いて欲しかっただけなんだよ。何、損はさせないぜ？　なんせ僕は……」

一粒で一京二千八百五十八兆五百十九億六千七百六十三万三千八百六十五度も美味しい、この世で一番素晴らしい美少女だからね。

こうして、金城勇魚は悪平等（ノットイコール）となった。……カタチだけは。とりあえず、「ただモテるだけの人外」と名乗る恥ずかしさを我慢すれば、メリットは計り知れないのだ。

勇魚はなじみの中二病が一刻も早く完治するよう、密かに天に祈りを捧げた。

球磨川禊の場合

金城勇魚が安心院なじみを篭絡した。そして、球磨川禊はそれが気に入らなかった。これは要するにそういうことなんだろう。

勇魚は幼い頃より、恋愛感情というものがイマイチ理解できなかった。それも当然と言えよう。何せ、金城勇魚という存在を認識した女は、須らく彼に惚れるしかないのだから。

独占欲を抱こうにも、女は全て彼のもの。世界の法則がそう謳っている。

嫉妬心を抱こうにも、誰も彼から寝取ることなど出来はしない。世界の法則でそう決まっている。

対抗できうる可能性を持つ唯一の存在である安心院なじみも、既に勇魚が篭絡済み。故に彼が恋愛というものを体験する日は、きっと永遠にこないのだろう。

そんな勇魚だから、何故球磨川に目の敵にされたのかが解らなかった。

安心院なじみという人外に、能力を人質として取られた勇魚。しかし、なじみは本当に話を聞くだけで、二つのスキルを返してしまった。拍子抜けする勇魚に、彼女はこう言った。

「あんまり意地悪して、嫌われたら元も子もないからね。僕は好きな子に意地悪はするけど、やりすぎて嫌われるほどに子供じゃないんだぜ？」

なるほど、確かに中二だとそんな感じかもな。勇魚は心の底から納得した。

「……何か勘違いしてないかい？　まあ、いいや。それじゃ僕は、約束通りめだかちゃんに色んなスキルを伝授してくるよ」

黒神めだかの持つ異常（アブノーマルジ・エンド）、完成。他人の異常性・才能を本来の持ち主より使いこなし、完成された状態で体現・会得できる、問答無用で相手の上を行く能力……らしい。なじみの持つスキル、ウィキなんとかで調べた結果だ。ちなみに今現在は、身体能力や技術のみが“完成”されている状態とのこと。

ただの財産目当てで近付いたのだが、これは思わぬ拾い物だった。勇魚は内心でほくそ笑んだ。

例えば腑罪証明（アリバイブロック）。いつでも好きなときに好きな場所にいることが出来るスキル。宇宙など現実世界だけでなく、天国、地獄、他人の夢や心の中でも自由にいることが出来る。これがあればいつでもどこでも、勇魚がピンチのときはめだかに助けて貰える訳だ。

例えば無効脛（ライフゼロ）。スキルを無効化するスキル。これがあれば、黒神めだかは異常（アブノーマル）や過負荷（マイナス）を相手にしても、ほぼ無敵を誇れるようになる。助けに来ためだかが返り討ちに遭う、などという無様なことが、万が一にも無くなる訳だ。

例えば死延足（デッドロック）。永遠に生きることが出来るスキル。これがあれば、黒神めだかは永遠に若く美しいまま、劣化とは無縁の存在となる。つまり永遠に勇魚を守り続けてくれる訳だ。

去りゆくなじみの背を眺めながら、勇魚は思う。安心院なじみを手中に納めたことで、何もかもが上手くいっている。なじみの手によって、真に完成されためだか。一京を軽く超えるスキルを持つなじみ。この二人に守られている以上、自分の安全は保証されたも同然。なじみのコネで箱庭学園への進学も決まっているし、学園生活に飽きたらあの二人に養って貰えばいい。人生順風満帆だ。

明るい未来に思いを馳せる勇魚。しかし彼は失念していた。確かに、めだかとなじみ、この二人に守られていれば最強だろう。しかしそうなるのは近い将来であって、今のめだかは未完成に過ぎず。そしてなじみもまた、めだかの教育のため勇魚の傍にはいないのだ。

ふと気配を感じ、振り返る勇魚。そこには如何にも「僕、不良です！」と言わんばかり格好をした男が、思いっきり鉄パイプらしき物を振りかぶっていて……。次の瞬間、勇魚は頭部に激しい衝撃を感じ、意識を失ったのだった。

勇魚が気が付くと、そこでは一人の男が、それはもう楽しそうに一人の少女の顔を剥がしているところだった。仰向けに倒れている女性に馬乗りになり、刃物で付けたのであろう切り込みに指を突っ込んで。男子生徒はメリメリと力任せに皮を剥いでいく。めりめり。ぐちゃぐちゃ。そんな光景を寝起きで見せられた勇魚は、しかしそ

んなことはどうでもいいとばかりに、全く別のことを考えていた。

とりあえず、目が覚めていることを感付かれると面倒そうだ。そう考えた勇魚は目をそっと閉じ、死んだふりをした。

考えるのは、自ら意識を奪った不良のことだ。勇魚に敵対する、それ即ち男だということ。ならばＴＳすればいい、のだが……。勇魚の過負荷（マイナス）である『性別反転（トランスセクシャル）』は、発動するには対象を視界内に収めている必要がある。普通ならかなり緩い、それこそあってないような制約だ。しかし、今回のような背後からの不意打ちには、全くの無力である。

人間の皮が剥がされる音をＢＧＭに、勇魚はつらつらと考える。そして彼は、ついに解決策を見出した。全部めだかかなじみに丸投げしよう。その間自分は、大人しく家に引き篭っていればいい。……ある意味で、すごく彼らしい答えだった。

勇魚がそう結論したところで、べりっという一際大きな音が聞こえた。どうやら男が少女の皮を剥がし終わったらしい。べちゃべちゃという粘性の音がする。剥がした皮で遊んでるのだろうか？　勇魚は内心で、終わったらさっさと去ねよ、このカス！　などと散々に罵倒しつつも、息を潜めて待ち続けた。

しかし、そんな勇魚の思いも虚しく、徐々に近付いてくる気配。ぽたぽたという水音に怖気がした。やがて、血に濡れた手が勇魚の頬に触れる。べちゃりという音に、鉄くさい臭い。

迫る来る恐怖に、勇魚は耐えることができなかった。彼は目を開けると、過去最高の速度と精度で『性別反転（トランスセクシャル）』を発動、目の前の男

を女に強制性転換しようとして……。

「球磨川ァァァアアアッッッ！！！！」

突如としてこの場に乱入してきた黒神めだかが、男を思い切り殴り飛ばした。凄まじい勢いでぶっ飛ぶ男、球磨川。そんな明らかに死に体の球磨川に、容赦なく追い打ちをかけるべく、彼を押し倒しマウントポジションで滅多打ちにするめだか。そして、突然のことにただただ呆然と固まるしかない勇魚。

しばし肉を打つ湿った音を聞いていた勇魚だったが、飛び散った血が彼の顔にまで飛んできたことを切っ掛けに正気を取り戻した。

なんだかよく解らないが、これは逃げだすチャンスでは……？

部屋を見渡せば、出口はすぐに見つかった。しかもなんと、お誂え向きなことに見張りでもしていたらしい不良は、めだかに伸されて重傷だ。

勇魚は逃げだした。こんな気持ち悪い空間には、もう一秒たりとも居たくはなかったから。躊躇する理由、何もはなかった。……去り際にしっかりと、不良と球磨川はＴＳしていったが。

勇魚は知らなかった。過負荷（マイナス）は、好かれる方が致命的なのだと。この日から勇魚は、深刻なストーカー被害に悩まされることになるのだった。

打ち切りエンド

なんだかんだで平穏な中学時代を過ごし、なじみのコネで箱庭学園へと入学した勇魚。最近では笑顔も見せるし、人並み程度にはよく喋るようになった彼だったが、男の神経を逆なでするところは相変わらずであった。そんなわけで金城勇魚は、入学そうそう早速絡まれていた。まあ、絡まれたと言ってもどちらかと言えば今回は、勇魚の方に非があった訳だが……いつもどおり、彼にとっては知ったことではなかった。

十三組として箱庭学園に入学した勇魚。十三組には登校義務が存在しない以上、彼がここ箱庭学園へとやってくる必要はないのだが、しかし折角の高校生活だ。楽しまなければもったいない。そんなわけで、昼過ぎになって目が覚めた勇魚は、悠々自適に重役出勤していたのだが……。

「……迷った」

箱庭学園は、一学年に付き一組から十三組まであるマンモス校である。当然その敷地面積は広大で、入学一ヶ月目にして初登校の勇魚が迷子となるのは必然であった。

「くそっ、なんて学校だ！　コネで入試パスだから入ってやったというのに、この仕打ち！　案内役くらい用意しとけよ！」

勇魚が今日登校したのは単なる彼の気まぐれで、誰もこのことを知る者は居らず。居たところで、十三組とはいえひとりの生徒のために案内役を用意するはずもないのだが、勇魚は本気で学園の対応に憤っていた。

「はぁ、はぁ……。つ、疲れた……。……お、椅子見っけ」

宛もなく歩き回り、ついには勇魚が体力の限界へと到達する、その直前。終業の鐘が鳴り、ほぼ同時に彼の目の前を、一人の少女が通り掛かった。

「ねぇ、君」

勇魚が声を掛ける。少女がこちらを振り向いた。

「僕、すごく疲れてて……。だからお願い、ちょっと跪いて椅子の代わりになって？」

「は、はい！　喜んで！！」

全力で勇魚のもとへと駆けつけ、そのまま四つん這いになる少女。そこへ躊躇なく腰を下ろす勇魚。椅子にされた少女は嬉しそうに笑み崩れ、勇魚が少女のポケットから取り出したハンカチで爽やかに汗を拭う。果てしなく不自然でありながら、勇魚にとってはありがちな光景が、そこには広がっていた。

「おい、おまえ……。一体何をやっている？」

汗も引いて、ようやく勇魚が一息ついた頃。突如として常識はずれの巨漢が現れ、苛立たしげに勇魚へとそう問いかけてきた。

「何って……休憩ですよ」

見てわかるでしょ？　椅子になった少女の頭をペシペシと叩きながら、和かに応える勇魚。しかし巨漢の男はそれが気に入らなかったのか、鬼のような形相で勇魚へと殴りかかった。クレーンですら破壊するほどの本気の一撃が、吸い込まれるように勇魚の顔面へと向かって行き……。

「何をしておられるのですか、日之影生徒会長」

何の前触れも無く巨漢の男、日之影空洞の背後へと現れたためだかが、彼を思い切り張り飛ばした。殴り掛かった状態のまま、右脇腹の肋骨と周辺の内蔵に甚大なダメージを受け、物理法則を嘲笑うかのように真横へ飛んでいく日之影生徒会長。やがて校舎へと叩きつけられた彼は、ずるずると力なく崩れ落ちた。

「生徒会長？　あの暴漢が？」

めだかの無茶苦茶さは今更なので敢えて突っ込まず、勇魚は彼女の台詞へと反応した。いたいけな一生徒に、突如として殴りかかってくるような気狂い。そして、そんな頭のおかしい人物が生徒会長を務める箱庭学園。

「うむ。しかもアレはまだ序の口だ。軽く調べてみたのだが、この学園、平気で人体実験などもやっているらしいぞ」

「……うへぇ」

人外女が幅を利かせている学園である以上、碌でもない学校だとは思ってたが……。まさかそこまでとは。

「具体的には『フラスコ計画』なる陰謀が、学園の理事長の手で秘密裏に推し進められているようだ。計画の目的は、天才を人為的に生産すること。企画、原案は安心院なじみのようだが、彼女はおまえを見つけて以来放置していたらしいな」

何やってんだよ、なじみのヤツ……。この僕が入学するんだぞ？　キレイに片すくらいしておけよな……。

「更には一十三組なるものも組織される予定とのことだ。最も、こちらはあくまでサブプランのようだが」

「マイナス？　……ああ、過負荷（マイナス）ね。それって球磨川みたいな気持ち悪いのがうぞうぞ集まってくるってこと？　うわぁ……」

なにそれ、激しく勘弁して欲しいんだけど……。嫌だなぁ、関わりたくないなぁ……。過負荷（マイナス）は過負荷（マイナス）同士で潰しあって、僕の視界には入らないで欲しい。……ん？　そうか！

「ねぇ、めだかちゃん。確か球磨川も僕をストーキングして、この箱庭学園に入学してたよね？」

「ああ、最近は絶賛不登校中だがな。おまえが登校しないから、来る意味がないと言っていたぞ」

知ってる。球磨川（アイツ）の僕を見るときの視線は、独特のねっとり感があって嫌でも気が付くから。でもそれも、これで解消できる！

「アイツを生徒会長にして、学園の平和を守ってもらうってのはどうかな？　そうすれば僕はストーカーから逃れられるし、学園は平穏を保てるし、一石二鳥だよね！！」

「確かに。しかし、ヤツが素直に従うとは思えんが。口だけで了承しつつ、おまえを付け回し続けるのではないか？」

うわ、やりそう……。う～ん……。ご褒美でもあげようかな？　甘くすると付け上がるから、できればやりたくないんだけど……。これも平和な学園生活のため。仕方ない、僕も妥協しよう。

「大丈夫、大丈夫！　見事達成したあかつきには、ご褒美だってあげるつもりだからね。それによく考えて見れば、アイツの大好きな少年漫画の主人公っぽい仕事だし。なんとかなるでしょ！」

「……ご褒美？」

「うん！　と言っても、まあ……。禊ちゃん、って名前で呼んであげるだけ……なんだけどね？」

後日、支持率ゼロ％で生徒会長となった球磨川禊。彼女は過負荷（マイナス）らしさを存分に発揮し、次々と勇魚の気に入らない存在を学園から駆逐いていくのだが……それはまた、別の話である。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4675u/

男の敵、女の天敵

2011年7月4日20時57分発行